

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
ひー10	<p>傷寒論・金匱要略条文</p> <p>読み および解説・その他</p> <p>白虎加人参湯</p>	<p>知母 (苦寒) 6g・石膏 (辛微寒) 16g・甘草 (甘平) 2g・粳米 (甘平) 9g・人参 (甘微寒) 3g</p> <p>上の5味を水400mlを以って煮て半分に煮詰め200mlとし、滓を去り、1回に40ml宛1日3回毎食前温服する。渴がひどい場合には更に夜1回温服させる。分量の服用でも効果がある。</p>
<p>弁太陽病脈証併治上第五第27条 (傷寒論)</p>		
<p>「桂枝湯を服し、大いに汗出でたる後、大煩渴解せず、脈洪大の者、白虎加人参湯之を主^{つかさど}る。」</p>		
<p>解説 内熱があるのに、表熱だけを目標に桂枝湯を与えると、桂枝や、生姜の辛温剤によって生じる熱と、内熱が合して、内熱が多くなる。そのために、汗が出過ぎて津液が不足する。津液が不足すると、病は治らないで、大煩渴、すなわち激しい口渴が現われ、脈は熱が多いため、洪大になる。これらは、熱が陽明の胃に入り込んだための証であり、このような場合には、白虎加人参湯が主治する。</p> <p>この薬方は、発汗したために、表の熱が内に入って、内熱がひどくて起きる症状である。</p> <p>白虎加人参湯は、汗出で、口渴劇しく冷水を多量に飲む。熱があるのに、汗が出るために悪寒がする（この時の悪寒は軽くて短時間である）熱病に用いる。</p> <p>白虎加人参湯は、赤みの強い劇しい痒みのある皮膚病に使われる（劇しい痒みを、熱の変形と考える）。</p>		
<p>白虎加人参湯証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「汗出で、寒気あり、大いに渴して水をみたがる者、熱無く唯背中がぞくぞくとして悪寒し、口中乾いて頻りに水を飲みたがる者、汗が出て悪寒する癖に、非常に熱がって水を呑む者。本方は、渴が第一の證なり。」と記されている。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>胃の方に、熱ががっばり入ってしまって、大煩渴、脈洪大という症状を現わしてきたもので、人参は、脾胃の働きを補う作用で、白虎湯の働きは、胃を中心に熱を取って行く。</p>		
<p>白虎加人参湯は、太陽・陽明・少陽の合病で、表から裏に渡って熱がるが、特に陽明の胃に、熱ががっばり入り、大煩渴、脈洪大となったもので、人参で脾胃の働きを補いながら、白虎湯の働きが、陽明の胃の熱を去る。</p>		
<p>参考 太陽病で、桂枝湯を服して、大いに発汗し、脈洪大になったものには、桂枝二麻黄一湯を与えるが、この場合は表熱の脈洪大で、陽明胃の裏熱から生じる大煩渴は伴わない。</p>		
<p>弁太陽病脈証併治下第七第41条 (傷寒論)</p>		
<p>「傷寒、若しくは吐し、若しくは下して後、7、8日解せざるを病み、熱結裏に在り、表裏俱に熱し、時々悪風し大いに渴し、舌上乾燥して煩し、水数升を飲まんと欲する者は、白虎加人参湯之を主^{つかさど}る。」</p>		
<p>若しくは、下して、解せざる、在り、俱に、数升、主^{つかさど}る</p>		
<p>解説 傷寒で、吐かせたり、または下したりした後で、7、8日経っても治らない病状で、熱結が裏にあつて、胸が苦しく、表も、裏も共に暑がって、時々ゾクゾクと悪風がして、大変咽が渴き、舌も乾いて苦しく、しきりに水をガブガブ飲みたがる様なものは、白虎加人参湯が主治する。</p> <p>これは、傷寒であるのに、吐かせたり下したために、表熱が裏に入って、胃に熱結してしまって、大渴を生じたのである。</p>		
<p>弁太陽病脈証併治下第七第42条 (傷寒論)</p>		
<p>「傷寒大熱無く、口燥渴、心煩、背微悪寒する者は白虎烏人参湯之を主^{つかさど}る。」</p>		
<p>解説 傷寒で、表に熱があつて暑がっていたのに、表に熱が無くなって、触っても暑く無く、口が熱を持ってはしゃいで、咽が渴いて、胸の辺りが苦しく、背中の方に少し悪寒のある者は、白虎加人参湯が主治する。</p> <p>腹は陽明で、背は太陽であるから、陽明に熱が入って、口燥渴、心煩の証を生じ、太陽に寒を生じて、背微悪寒を生じている。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>傷寒で、表に熱があつて暑がっていたのが、自然に表の熱が裏に入り、主に胃に入ったものと解される。</p>		
<p>この場合の「背微悪寒」は、内熱より生じたもので、表証ではない。</p>		
<p>弁太陽病脈証併治下第七第43条 (傷寒論)</p>		
<p>「傷寒、脈浮、発熱、汗無く其の表解せざる者は白虎湯を与うべからず。渴して水を飲まんと欲し、表証無き者は白虎加人参湯之を主^{つかさど}る。」</p>		
<p>解説 傷寒で、脈が浮いていて、発熱し、無汗の者は、その病人の表がまだ解していない。脈は浮であるから、病は表にあり、発熱も、無汗も、発汗させる状態であるから、麻黄湯で主治するべきで、白虎湯を与えてはいけない。咽が渴いて水を飲みたがり、表証の無いものは、白虎加人参湯が主治する。</p>		
<p>弁陽明病脈証併治第八第45条 (傷寒論)</p>		

「陽明病、脈浮にして緊、咽燥口苦、腹滿して喘し、発熱汗出で悪寒せず反って悪熱、身重す。若し汗を発すれば則ち躁し、心憤憤として反って譫語す。若し焼針を加うれば必ず恍惚、煩躁して眠るを得ず。若し之を下せば則ち胃中空虚、客气膈を動じ、心中懊憹す。舌上胎の者は梔子豉湯之を主る。若し渴して水を飲まんと欲し、口乾舌燥する者は白虎加人参湯之を主る。若し脈浮、発熱、渴して水を飲まんと欲し、小便利せざる者は猪苓湯之を主る。」

汗出で、反って、若し、則ち、憤憤として、譫語、恍惚、下せば、懊憹、主る

解説 陽明病で、脈が浮いて、緊を現わし、咽が燥いて、口が苦く、腹が張って、ゼイゼイし、発熱して汗が出て、悪寒せずに反って悪熱して身が重い。もし汗を発すれば表を攻めて、表熱が取れるけれども、内熱が益々ひどくなる故に熱がって、胸の辺りがじりじりしてうわごとをいう様になるのである。もしも焼針を加えると、身体がガクガクとなって苦しくなり、眠ることが出来なくなる。もしも下すと胃の中が空っぽになって虚してしまい、客气が横隔膜を動揺させて胸の中が苦しくなって、なやましい気持ちになり、舌上に白苔が出来るようになる者には、梔子豉湯が主治する。もし咽が渴いて水を飲みたいと思ひ、口が乾いて舌がはしゃぐ者は、白虎加人参湯が主治する。もしも脈が浮いて熱を發し、咽が渴いて水を飲みたがり、小便の出が悪い者は、猪苓湯が主治する。

陽明病で、脈が浮いて、緊を現わし、咽が燥いて、口が苦く、腹が張って、ゼイゼイし、発熱して汗が出るが、悪寒せずに反って熱がって身が重いこの病状は、陽明病ではあるが表裏に病邪がある。

陽明病であっても脈が浮、緊で、発熱するのは、邪熱が表にあって表実を呈している。咽燥、口苦、腹滿、喘は皆、内熱が原因で起きた症状で、特に胃熱は咽燥を生じ、心熱は口苦を生じ、腹滿は腹中の熱であり、喘は胸中の熱である。熱を發して汗出で、悪寒せず反って悪熱して身が重くなるのは、陽明、即ち裏に熱が入り、脈浮で、緊であるので表にも熱があり、熱気が表裏にこもって身重を起すのである。この様な状態を呈している場合に、もし間違えて発汗してしまうと、表熱が取れるけれども、内熱が益々ひどくなって燥を生じ、熱がって胸の辺りがジリジリして、うわごとを言う様になるのである。もしもこれに間違えて焼針を加えると、血気が火のためにさわぎ出し、必ず体を縮めて、筋肉がピクピク痙攣して煩躁して（苦しく、熱がって）、眠ることが出来なくなってしまう。もしもこれに間違えて下しをかけると、裏熱が去るけれども、胃中が空っぽになって虚してしまい、表の邪熱が虚に乗じて上焦に陥りて胸中に入り、邪気が横隔膜を動揺させて心中懊憹、即ち胸の中が苦しくなって、なやましい気持ちになり、血熱が心に及んで、心の官である舌上が白苔で覆われるようになった者は、梔子豉湯が主治する。

梔子豉湯は胸中の熱を、吐して清する薬方であり、邪熱が胸中に入ったことを意味する。

もしも下して後に、裏に熱が入って外熱と一緒に、咽が渴いて水を飲みたがり、胃中が渴く様になり、口が渴き、筋肉に熱を持ち、舌が熱くなって苦しいのは、心に熱を持ったからである。この様な場合には白虎加人参湯が主治する。

白虎加人参湯は、裏熱（熱が胃を中心として全身に及ぶ）の時に用いる処方である。

もしも脈が浮いて熱が出て、咽が渴いて水を飲みたがり、小便の出が悪い場合は、熱が太陽の經に及ぼし、一番深い膀胱に熱を持ったもので、この様な場合は猪苓湯を用いるのである。

「方剂決定のコツ」の注釈

この条文は陽明病の証で、発汗したり、焼針を加えたり、下したりした後で、三つの証に分かれることを言っている。

上焦に熱がこもれば梔子豉湯証を起し、中焦の熱が主となれば白虎加人参湯証を起し、下焦の膀胱に熱が入れば猪苓湯の証を起すことを掲げている。

瘧疾喝病脈証併治第二第 26 条（金匱要略）

「太陽の中熱の者は喝これなり。汗が出でて悪寒し、身熱して渴するは白虎加人参湯之を主る。」

解説 太陽の經が、夏の熱、即ち暑さに当てられたものが、喝病である。喝病の症状は、前条の瘧疾喝病脈証併治第二—3 第 25 条（金匱要略）に詳しく説明されている。

即ち、太陽の經が暑さに当てられたもの（喝とは夏熱に当てられたものを云う）の症状は、熱が出て悪寒し身体が重くて（身体の動きが悪く、或いは身が大儀であって）、うずき痛み、脈を診ると弦（弓のつるの様にピンと張っている）で細くて朮（ネギの葉即ち青い所を押してみるとペコッとつぶれてしまう様な感じの脈で血虚の脈をいう）で、遅い脈をしている。そして小便をし終わると、ゾクゾクとして手足の先から冷えて来る。少しばかりの運動とか仕事とか身体を動かすと疲れて身体が熱し、一人で口を開けてしまい、前歯が乾いてしまう。この様な病人を治そうと思って発汗させると、悪寒がひどくなり、温針（陽気を補って発汗させる治療法である）で加療すると、発熱が益々ひどくなり、内熱であると思ひ違ひをして、度々下してやると、下したために、下焦の水が少なくなるために小便の出が悪くなってしまう。

その喝病で汗が出て、寒気があって、身体が非常に暑がって、水を飲みたがっているものには、白虎加人参湯が主治する。この白虎加人参湯の喝とは、大煩渴ということが大切なことで、幾ら水を飲んでも飲み足りなく、特に夜は、陽気が中に入るので、寝てからヤカン一杯の水を飲む様な渴であり、汗が出て、悪寒のするくせに、非常に暑がって水を飲む人である。本方証の大切なことは、渴である。

白虎加人参湯は、知母・石膏で表位より、裏位に及んだ熱邪を冷やし、甘草・粳米で胃気を助け、人参で津液を補充する。

消渴小便利淋病脈証併治第十三第 13 条（金匱要略）

「渴して水を飲まんと欲し、口渴き舌燥する者は白虎加人参湯之を主る。」

解説 咽がやたらに渴いて水を飲みたがり、水を飲んでも、口がカラカラに乾き、舌に熱を持って苦しいものには、白虎加人参湯が主治する。